

お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊十一号

法然上人のお言葉

『元祖大師御法語』前篇 第27 親縁 ちんねん 勅伝第23巻

冬号 平成三十年二月二十六日
(不定期です)



善導 ぜんどう) の、三縁 さんえん) の中 うち) の親縁 ちんねん) を釈 しゃく) し給 たま) うに、

衆生 じゆじよう) ほとけを礼 らい) すれば、佛 ほとけ) これを見 み) たまう。

衆生 じゆじよう) ほとけをとなうれば、佛 ほとけ) これをきき給 たま) う。

衆生 じゆじよう) 佛 ほとけ) を念 ねん) すれば、佛 ほとけ) も衆生 じゆじよう) を念 ねん) じたまう。

かるがゆえに、阿弥陀佛 あみだぶつ) の三業 さんごう) と行者 ぎようじゃ) の三業 さんごう) と、かれこれひとつになりて、佛 ほと

け) も衆生 じゆじよう) もおや子 こ) の如 ごと) くなるゆえに親縁 ちんねん) となずくと候 せうら) いぬれば、

御手 おんて) にず(数珠)をもたせたまいて候 せうら) わば、佛 ほとけ) これを御 ぎ) らん候 せうら) うべし。

御心 おんこころ) に念佛 ねんぶつ) 申 もう) すぞかしと思 おぼ) し候 せうら) わば、佛 ほとけ) も行者 ぎようじゃ) を

念 ねん) じ給 たま) うべし。

されば、佛 ほとけ) に見 まみ) えまいらせ、念 ねん) せられまいらす御身 おんみ) にてわたらせたまひ候 せうら) わんずるなり。

さは候 せうら) えども、つねに御 おん) した(舌)のはたらくべきにて候 せうら) うなり。

三業 さんごう) 相応 せうおう) のためにて候 せうら) うべし。三業 さんごう) とは身 み) と口 ぐち) と意 こころ) とを申 もう)

し候 せうら) うなり。

しかも佛 ほとけ) の本願 ほんがん) の称名 ちようみよう) なるがゆえに、こえ(声)を本体 ほんたい) とは思 おぼ) し食 め) すべき

にて候 せうら) う。

さて我 わ) が耳 みみ) にきこゆる程 ほど) 申 もう) し候 せうら) うは、高声 こうしやう) の念佛 ねんぶつ) のうちにて候 せう

ら) うなり。

1、心からまごころをもって、2、自身の罪業の有無を論ぜず、3、極楽に生まれようと願って」、なむあみだぶつ」と阿弥陀様の御名前を称えるのが、極楽往生が決定されるお念仏です。

南無阿弥陀仏」のお名号を声にする事は、私達が極楽世界に生まれる事が出来るために立てられた、阿弥陀仏の本願(先に立てた熱望)に誓われた行(行為)です。私達の念仏には、種々の阿弥陀様のご縁が必ず働いています。

善導大師という高僧の方は、この、称名念仏に対する阿弥陀様の本願力のご縁を三つに分類して、三縁」とおっしゃっています。(善導集記『観無量寿仏経疏』中)

善導大師「シナの七世紀 唐」の時代の人。三昧発得の聖者」といわれ、この身このままに極楽世界を感じしたり、他人をして、極楽世界を觀させた、阿弥陀仏、釈尊とまみえたという事象のあった人。法然上人は、この方から浄土の道の指南を受けた、と伝えられています。

三縁(三つの御縁)とは、
一に、親縁しんえん
二に、近縁こんえん
三に、増上縁ぞうじょうえん
です。この三つの言葉をまとめて、三縁」というのです。

前ページの法然上人の言葉は、このうちの親縁しんえんのお話しです。よろしければ、よく味わってみてください。

この阿弥陀様の念仏のご縁は、親子の様な親しい間柄になりますよ」というお話しです。

お念仏をすると、私たちの身口意の三つの業ごうごうごう自身ごんじの身体と言葉の

行為と心のありさま」が、親しくあい応ずる関係になりますよ」というのです。

つまり、

私達生ける者が、阿弥陀様を敬って、合掌して礼(頭を下げる)をすると、阿弥陀様も、その私達の姿をご覧になっています。

私達生ける者が、阿弥陀様の御名前を称えれば、阿弥陀様も、その私達の声をお聞きになっています。

私達生ける者が、阿弥陀様を思い念ずれば、阿弥陀様も、私達のことを思い念じています。

という事です。

このことを一般の宗教の様に(無理に)信じなさい、と言っているのではありません。かりそめに、たとえふざけて人間が礼拝、念仏をしていても、阿弥陀様という方は、必ずすくい取りたい」というまごころで、その行者をご覧になり、声をお聞きになり、その人の幸福を念じ、救いたくて仕方がないお気持ちでいらっしゃる、という、仏様の方のご行為、ご縁が、常にこのようなものです」と伝えられているのです。私達が信じていても、信じていなくて気がつかないでいても、常にみ仏のそういった働きかけがあるのです、という事です。素直にこのことを受け入れられれば、自然にだんだんと自信のあるお念仏の申しようになつていくものと思えます。

されば、佛(ほとけ)に見(まみ)えまいらせ、念(ねん)ぜられまいらする御身(おんみ)にてわたらせたまい候(そうら)わんずるなり。

さは候(そうら)えども、つねに御(おん)した(舌)のはたらくべきにて候(そうら)うなり。

三業(さんごう)さんごう)相応(そうおう)のためにて候(そうら)うべし。

三業(さんごう)さんごう)とは身(み)と口(くち)と意(ごころ)とを申(ま)む

う)し候 そうる)うなり。

このように、念仏を称える方は、阿弥陀様をご覧になっており、思い念ぜられているのですが、つねに「南無阿弥陀仏」と声を出して申すべきです、という意味です。なぜなら、私達の心の方が、周囲に起こる事によって、嬉しい気持ちにも、いやな気持ちにもなる、という、ふらふらとした性質を生まれながらに持っているからです。

出来る限り、最初は、たとえば朝夕十遍ずつでも、お念仏を習慣になさるのが良いと思います。慣れてきたら、いつでもどこでも遍数にこだわりなく、自然に称えられるようになるでしょう。

阿弥陀様の方からは、常に慈悲の心、苦しみを抜き、樂を与えようとする心、自分を降り注いでいらっしやっていると、思い取るのが大事なことになると思います。阿弥陀様をお慕いする気持ちをそだてましょう。

しかも佛 ほとけ)の本願 ほんがん)の称名 じょうみやう)なるがゆえに、こえ(声)を本体 ほんたい)とは思 おぼ)し食 め)すべきにて候 そうる)うなり。

さて我 わ)が耳 みみ)にきこゆる程 ほど)申 もう)し候 そうる)うは、高声 こうしよう)の念佛 ねんぶつ)のうちにて候 そうる)うなり。

いつでもどこでも、の念仏は、実は、我 わ)が耳 みみ)にきこゆる程 ほど)のものが、高称の念仏、たかく、心地よく真剣でまじめな念仏)のうちに入りますよ、と、明かされます。

なぜなら、いつでもどこでも」となった念仏は、大概、人混みのなかだったり、家庭のなかでのちよっとした時だったり、仕事場での些細な時だったり、お風呂、トイレの中だったりするからです。こういうときでも自然に意識して、本願のお念仏が出来るようになってきたなら、大きな声では、人目にはばかるでしょうから。他の人の耳には聞こえない程の、それでいて心に喜び勇みある豊かなお念仏になるもの



だ、という趣旨の伝わりです。このような境地に早くなりたいものです。

今回は、称名念仏に関する「阿弥陀様の御縁、働き」の内、

親縁)のお伝えをさせて頂きました。文章行き届かない所は、何卒ご容赦頂き、要旨をお受け取り戴ければ幸いです。

上図は
一当麻曼陀羅図(部分)
極樂世界を表現した図です。

日本の習慣・日本人の心

3、古墳のおはなし

「古墳」と聞けば、皆様をただでも 天昔に日本で造られた、偉い人のお墓のことですね」と、ピンとくると思っています。

「古墳」と書くと、「いにしへの墳墓(お墓)」と覚えてしまいが、その数を尋ねれば、今現在全国で分かっている範囲で、なんと概ね十六万基もあります。コンビニの店舗数は、主要六社全国で五万五千店程ですので、いかに古墳の数が多いかがお分かりになると思いますが。

長辺が数メートルから、仁徳天皇陵のような四百六十メートルのものまでさまざま大きな古墳すべての数が十六万基ということですが、大きさはさまざまですが、現代教科書では、「古墳時代」として三世紀中頃から七世紀いっぱいまでの四百五十年間の内に建てられたのですから、平均してしまえば、一年で三百五十基余りが建造された計算になります。

一番小規模である、十メートル四方余りの「方墳(四角い古墳)」や「円墳(丸いトーム状の古墳)だけが作られたとしても、平均して毎日どこかで大きなお墓がつくられていることになり、一つが一日で造られるはずがありませんから、驚愕の史実と言わざるを得ません。

なぜこんなにも多くの大きなお墓がある時期に集中して作られたのでしょうか？

このことには、いまだに解決していない重大な疑問があると言わざるを得ません。

その疑問というのは、

一、なぜ「古墳」は、たいがい平地、平野にあるのか。平らで広い地面・土地の中に、丘のように盛り土でできているのです。

勿論、例外はあります。石造りのものもあり、自然の山肌で作られ

たりもあるようですが、これは、あくまでも少数の例外です。今ここで取り上げているのは「古墳」の大多数である、土盛りによる「方墳」

「円墳」前方後円墳」のことです。

十メートル四方の方墳だけ考えても、何トンの土がいるでしょうか。平野にあるのですから、その土は、どここの山地から運んできたのでしょうか。ほぼ毎日日本の国土のどこかで築造の作業が行われていると考えられる数ですので、建設機械が無い時代に、とてつもない労力がはらわれたことになりました。

二、現代までに、かなりの調査発掘がされていますが、確かに「^{げんしつ}雲室」などと呼ばれる埋葬空間を取る施設があるものが多いと思いますが、それらは、平面図を見ると、極端に土盛り部分の中央から外れた場所に設けられているのです。「方墳」「円墳」「前方後円墳」皆、この例が多いようです。

このことが、何を物語っているかといえは、そうです、土盛りをした後から、埋葬施設をつくったのではないかと、ということですが、土盛りをする前に、埋葬施設を石などで作るのなら、土盛りが後なのですから、埋葬のための空間は大体、盛り土の形状の中心になるはずですが、わざわざ端っこの方に石室などが位置するように土盛りをする方が、困難な作り方となりはしませんでしょうか？

三、お墓といえは、純粋に精神上的の動機から建てられるもので、物理・経済的に何の生産性も生まないものです。先述のような最小でも十メートル四方もの規模の盛り土の構築物をのべ十六万基という数になるまで四百五十年間の間とはいえ、作り続けた、私たちの祖先は、その作業にそれだけの労力と富を注いで、なお平気だったのででしょうか？

現代におきかえて、十六万もの十メートル四方、高さ三メートルほどの土盛りだけだとしても、それらを建築機械を使わないう山の手を削り運んで、各所に設備する事を考えると、物心両面、かなりの損失

です。人海戦術になりますから、その使役に当たった人々は、仕事をしている暇もままなりません。昔の人の生活で考えれば、作物を作る暇がありません。しかも、只の「王盛り」ではありません。作られた当初はたいがい、押し固めた土質の表面に、薄い石などのプレート状のものを貼り、まるで綺麗な人工物だったのです。段々の円形・台形状に三層ほど盛り固めて建てられたものです。(左写真と参照) お墓ならば、作ったのらば、お参りするだけです。生活の為のなにかの資糧が、生み出されるわけではありません。



史跡八幡塚古墳 中央手前)と史跡
二子山古墳 右奥)
高崎市教育委員会により復元整備
(群馬県HPより)

歴史上のある時、突然のようにこれだけの大規模なお墓が沢山作られ始め、ある時、突然のようにその行為がほとんど無くなった感があります。

もし、仮にも一部の権力者に奴隷のように使役されたのなら、さぞかし我が国の民衆は様々に疲弊した事でしょう。しかし、その後につづく時代は、疲弊するどころか飛鳥・奈良時代であり、国家政治のしくみが整う進歩の時代です。

どうもおかしいと思われませんか？実は、こういう単純あたりまえな疑問さえも、わたくしは、つい数年前まで、浮かびもしませんでした。

結論を申し上げますと、今でこそ「舌墳」という言葉が使われていますが、実はこの時代、全国的に継続して、新田開発があったのだと

いう伝承が、戦前まではあったらしいのです。何もなかった平地に新たに田んぼを作ろうという全国規模の動きがあったのだという伝承です。

人口が少しづつ増えてくる状態にあわせ、人々がひもじい思いをしないようにするには、その時その時に応じて、必要なだけ新たに水田を造ることだと、その時その場所の先人の民がすべて納得し、腑に落ちたとして行った作業なのだというのです。

だから、最初からお墓を作るつもりで行ったものではありません。まして、奴隷のように生活を・時間を拘束されて強いられた事ではなく、民衆が自らすすんで力を合わせて、行った作業なのだ、という事です。

田んぼは、水を引きますから、水平に作らなければなりません。河川まで至る水路やため池も必要です。水路・河川には堤も必要だったでしょう。

当然、従来の地面を削らなければ田んぼは出来ません。その、けづって堤などに利用した残りの土を、一か所に盛ったものが、「舌墳」の最初の様子だったということなのです。このような伝承とそれにもとづく説が今でもあるのです。

平野の中にポツンとあるのは、そのためです。わざわざ山の土を削って持ってきたものではない、という伝承の方が、先述の疑惑をすべて解消し、きれいに説明、解釈できるのです。

みんなの十分で豊かな生活を維持するために新田と力をあわせて造るのは、どうしても必要なことだったのです。民衆の納得済みの開発事業だった、という説です。

善導寺の近くにも、二つ「舌墳」があることが分かっています。館林・大田ですと大変多いです。そしてたいがいが、河川、水路の近くに位置しています。

又、盛り土の状態だけで、中にはなにも無く、墳墓の体ではないものもあります。(これは全国区での事です)

又、水害の時には、避難場所にもなります。くずれないように表面を固めているのは、かかる理由もあります。

だから、最初は、誰かを葬る設備はありませんでした。玄室の位置が構築物の中心高の位置から著しくずれているのはこのためです。全体が出来た後から、玄室と、そこに至る出入り口、通路が出来た、と想像したほうが自然です。

そして、「吾墳」の形状は恣意的ではなく、大きく何種類かの幾何学的な形状になっています。これは、全国的に、規格のような要素が先に考えられていたことを示していると思われまします。つまり、各地方で、中央との何らかのつながりのある指導者がいたことが想像できるのです。そのような人は、地方の民衆にとっては、ありがたい人格者だったでしょう。そういう人と中心にして、地方の民の気持ちに結末したのです。

こう考えると、のらに、其のような指導者的な立場の人が亡くなったとき、村の人々はどうかんがえるでしょうか？

感謝と供養の念で、その残土構築物を立派なお墓として、使用したと考えてもおかしくありません。いつまでも忘れないうで伝承するため、です。

ただし、比較的少数のようですが、玄室のような埋葬設備が、ほぼ中心に位置していて、最初から、「お墓」として造られたとも思える事例もみられます。

特に古墳時代の期間を大きく前期・中期・後期終末期に分けると、前期・中期はほとんどが中心からずれていますが、後期終末期に中心に位置しているものが結構見られるようですが、中心に位置しているものでも中層階に当たる所に設置されている事例も多く、工事の最初からお墓だったか、中層まで盛られた途中で埋葬設備が作られたと考えられる例もよくあります。

新田開発による「盛り土」がのらなら「吾墳」となった、というこ

の説にもとずくと、例えばその地域の新田開発の進み具合のいつ頃、貴人とみなされた方が亡くなったかが想像されることにもなります。

ある時、この事業が全国的に終わった理由には、水田の水路、河川が皆海まで至る大きな河川につながったからだと考えられます。なぜなら、海まで至る大きな河川につながったその後の新田開発による残土は、水路でたやすく思ったところに移動、廃棄できるからです。大きく盛り土をする必要もなくなったでしょう。舟ごと簡単に処理できるからです。多くは、既存の河川や水路の堤の修復に使われたりしたかもしれません。そのような時期に終わります。

勿論、「吾墳は新田開発の結果だった」というこの説以外にも、最初から特定の人の権力の序列を示すための墳墓だった」という説の方が考古学の先生方の間では、根強いと思われまします。新田開発」という伝統的な解釈の方が、何の疑問も生じない、合理的なものだと思えますが、皆様はどう感じましたでしょうか？



(大和路の春)

◎ご本尊修復に関するご喜捨の募集は、御檀家の皆様を経済的ご負担の無いように、本当の意味での「喜捨」の功德となる方法を考えておりますので。要項のご通知については、今暫くお待ち下さい。

終南山 見松院 善導寺

小住 石井 侯雄揮